

<b>Title</b>	巻頭言 ダ・ヴィンチ「聖アンナと聖母子」礼賛
<b>Author(s)</b>	吉田, 博司
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 1-1
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4964">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4964</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

---

---

## 巻頭言

# ダ・ヴィンチ「聖アンナと聖母子」礼讃

昨夏、初めてルーブルを訪問、思わぬ一品に出会った。ダ・ヴィンチ「聖アンナと聖母子」である。これまでみた食傷気味の聖母子とはちがう。アンナの膝の上にマリアが座り、マリアの膝下の幼いイエスが細かい子羊に片足を乗せ、その両耳を無雑作に握りながらマリアを振り返っている。このやんちゃなイエスに向けられたアンナの眼差しは無条件の慈愛に満ちているが、マリアのそれは救済を求める子羊の視線に応えるように慈愛を含みながらもイエスを窺っている。

キリスト教絵画史の定番の中で、聖母子像はキリスト磔形図より、日本人に受け容れられやすいであろう。それは、母子一体感情を原型とする「甘えの構造」が日本文化の核をなすという、土居健郎氏の精神分析理論に見合うからである。

一方、西欧の精神分析理論では、忘我的衝動の抑制（自立と自己主張）の文化的伝統が強調され（K. Horney）、キリスト磔形図は嬰兒的態度からの解放を象徴すると解される（O. Rank）。

では、なぜ、クリスチャンでもある土居氏が認めるような「甘え」の像「聖母子」がキリスト教絵画史の定番なのか。それは、人間精神が母胎への憧憬と不安（恐怖）という両価感情の揺れの上であり（Rank）、西欧でもこの憧憬は基本的欲求であるからである。ただ、この揺れの乗り切り方が歴史社会的・個体的条件により文化的差異をもたらしたと考えられる。

「聖アンナと聖母子」は、両価性の揺れのきわめて西欧的な英雄の乗り切り方を表現してはいないか。英雄は母によって支配される世界への退行に反逆する（C. G. Jung）、マリアの膝下から離れたやんちゃなイエスは、確かに自立の一步を踏みだしている。マリアは覚束ないイエスを支えようと手をさしのべている。剥き出しの地層の上のアンナの足は、その爪が黒く汚れ、背景には寒々しく峻岳が望まれる。アンナとマリアの慈愛と対照的な、イエスがやがて歩まねばならない険しい道の予兆がそこにある。

ダ・ヴィンチもラッファエロも、ともに幼いときに母と離別した。両者の並々ならぬ聖母子像への執着は母性への憧憬である。しかし、両者とも創作という自立の努力で分離不安を克服した。マリアのまとうローブは青く波打ち、美しい。そこには「岩窟の聖母」の暗さはない。ダ・ヴィンチ「聖アンナと聖母子」礼讃。

聖学院大学 政治経済学部 政治経済学科長 吉田 博司

---

---